

研修の意義

2020.12.10

県教育センターには、専門研修というものがある。これには、経験年数などの制限がなく、十人十色の先生方が集まってくる。経験年数も年代も様々な教員が、自分で希望して受講する。したがって、熱心な教員が多いことが特徴である。中には、リピーターといえるような方もいらして、会員証とポイントカードを用意しなければならないくらいである。

「教員育成指標」というものがある。子どもたちにとって先生が若いことは魅力である。ステージ1の概ね1～5年目、ステージ2の概ね6～10年目ぐらいまでは、若さで何とかなるかもしれない。しかし、ステージ3の概ね11年目以降、ステージ4の熟練した教員となると、本当の意味での指導力がないと辛くなってくるのではないだろうか。

県教育センターでの研修を終えると、その後どうなるのか。アクションを起こす教員と特別なことはしない教員とに分かれる。研修そのものすべてが解決するわけではない。研修はきっかけにすぎない。研修後に何をするかが重要である。

多くの先生方は、自分からアクションを起こすことはしないであろう。ところが、県教育センターでの研修後に、メールで指導案を送ってくる方がいる。私はアドバイスを返信したり、直接電話で話をしたりする。授業参観の要請をしてくる方もいる。これは勇気がいることである。私は、授業を参観し、指導助言をするようになる。専門研修に毎年のように通ってくる方もいる。福島国語の会などの勉強会に参加する方もいる。

また、私のことを地区小教研国語部会の講師として依頼してくれる方々もいる。あるいは、校内授業研究会の講師として呼ばれることもあった。一番すごいアクションは、自分で勉強会を立ち上げ、会を運営してしまう方である。3年目の若さで専門研修に参加し、すぐに同期の先生方と協力して、自分たちの勉強会を立ち上げてしまった方がいた。私も、その勉強会に講師として呼ばれて参加したことがある。土曜日の日中に、多くの若い先生方が集まってきていることに驚かされた。自分から勉強したいという先生方がこんなにもいることに安心もした。

全国の都道府県、政令指定都市、中核市などに教育センター、教員研修センター、教育研究所などの施設がある。これらは、研修を主な業務としている。他にも教育委員会が主体となる研修もある。先生方のまわりには、研修の機会が用意されている。すなわち、きっかけをつかむチャンスはあるということである。

こんな方もいる。メールで学習指導案を送る方もすばらしいが、直接会いにくる方もいる。やはり、直接お話できるのはいい。容易に双方向のやりとりが可能となる。一番いいのは、学習指導案をつくる前の段階で会いにきてもらえるパターンである。簡単な授業構想ぐらいがあればいい。どんな児童生徒にしたいか、どんな力をつけたいかがあればよい。後は、一緒に授業を創っていくようになる。学習指導案は、一度出来上がってしまうと直しにくい。だれでも授業の設計図を書き直すことには抵抗があるであろう。

研修には様々なものがあるが、それが身になるかどうかは、その人次第である。きっかけをきっかけで終わらせないことが、本当の研修である。